人と思想

人間の確かめ

白井吉見

文藝春秋

人間の確かめ

定価　八五〇円

昭和四十三年八月一日　第一刷

著者　臼井吉見（うすいよしみ）

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（代）二六五―一二一一番
郵便番号一〇二・振替東京七七四三

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

＊万一落丁・乱丁の際はお取替いたします

© 1968 Yoshimi Usui　Printed in Japan

目

次

I 敗戦前後……9
八月十五日 11
隣は何をする人ぞ 62
二つの検閲 111
II 戦後史への証言……143
伊勢まいりの子供たち 145
山びこ学校の問題 152
山びこ学校訪問記 157
二十五歳になりました 169
教養とは何か 172
旭ケ丘中学から 175
紀元節校長を訪ねて 185
道徳教育はどう行われているか？ 192
「道徳教育の指導資料」をめぐって 209
国史教科書はどう変ったか？ 217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

教育の甘ったるさ 227
教育を知らぬ教育者 229
本を焼く母親たち 231
文化祭のアンケート 233
三つの本 236
「期待される人間像」報告を読んで 242
＊
内灘で見たこと、考えたこと 245
基地横田 256
相馬ケ原の出来事 261
「戦力なき軍隊」訪問 269
戦歿農民兵士の手紙 275
もの言う農民 280

Ⅲ
論議と雑談……297
短歌への訣別 299

感傷的な風景 304
歌集「巣鴨」 306
詩集「編笠」 307
短歌の宿命 312
伝統の問題 318
伝統ということ 323
古典について 328
ウソと笑いと 332
言葉の復讐 334
日本語の問題 338
日本語と酒と 343
実験小説 346
アンガージェの文学 349
フルシチョフの文学論 352
共犯者の文学 355
国民文学 358

諷刺文学 361
＊
新聞の中立主義 364
「愛国心」とは何か 375
「日本の理想」を問われて 381
国民教育の性格と方向 388
「近代」は人間を救いうるか？ 393
戦歿者追悼式の表情 400
天皇誕生日に思うこと 403

Ⅳ

むくどり通信……407
台北だより 409
香港にて 417
カルカッタから 421
アフガニスタンの首都カブールから 425
テヘランにて 436

カイロからルクソールへ 449
ローマ通信 470
あとがき……483

人間の確かめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

敗戦前後

八月十五日

敗戦の「玉音放送」は、千葉県八日市場から六キロほど奥まった山村の法華寺近く、農家の庭さきで聞いた。

六十人あまり、整列したまま、聞いた。この仲間は、正式な呼び名によれば、東部軍決二二四五部隊第二大隊第六中隊第二小隊であるが、通常は臼井伐木隊と呼ばれていた。

動員が下令されて、決部隊のできたのは、昭和十九年八月、サイパンの玉砕発表と同時だった。つまり、大本営が本土防衛を決意して編成した最初の部隊で、アメリカ軍の主力が東京占領のため、関東地区に上陸してくるのを迎え討つ、もっぱら攻撃の任務を課せられていた。もっとも、そんなことを知ったのは、ずっと後のこと。一年前に、郷里の松本連隊に召集されていた僕は、千葉の歩兵学校を解散して、そこの将兵を基幹として新編成された、この精鋭部隊にくりこまれたのであった。

動員が下ったとき、わがいのちもこれでおしまいと思った。なんという、みすぼらしい生涯かと思った。なぜなら、今度の動員はこれまでにない本格で、各分隊十二名ずつの正式定員であり、歩兵部隊のくせに、馬がいやに多い。これは、南方であれ、北方であれ、島行きではないということだ。そうなると、大陸だ。

といって、中国ではない。装備甲だからだ。相手が中国兵なら、装備は乙のはず。甲といえば、敵はアメリカ兵でなければ、イギリス兵だ。そうなると、行く先はインドか。フィリピンかも知れない。これは島ではあるが広大だから。サイパンが落ちたというのに、インドなり、フィリピンなりへ、やられるのは、途中の海へ沈むことにきまったようなものだ。ここ半年、松本駅から、次々に送り出した部隊の大半がそうだったように。

松本連隊で編成を終えた決部隊は、北アルプス中央登山口の中房温泉に近い、陸軍演習地に移り住んで、もっぱら対戦車戦闘と、米軍陣地攻撃の訓練をくりかえした。夜陰にまぎれ、蛸つぼを掘ってひそみ、這い出しては、また掘り、戦車が現れれば、爆薬入りの蜜柑箱を背負ったまま、次々にとびかかり、生き残ったものが、敵陣地にとびこむという戦法であった。わけても、これの「二十四時間訓

練」というのは、骨身にこたえた。飲まず、食わず、眠らず、しゃべらずの二十四時間ぶっ通しの訓練が、週に二回くりかえされた。僕は、ひそかに「爬虫類戦法」と名づけていた。人間がその昔、爬虫類だったときのすがたに戻って、アメリカの中型戦車に立ち向かうという、雄大きわまりない戦法であった。

軍が、将校だけに耳うちした説明によれば、アメリカの重戦車というのは、とんでもなく巨大だから、これは持って来ないだろう、これが来たら、肉薄攻撃だろうと、なんだろうとお手あげだ。中戦車なら、速射砲は役に立たないが、爆薬をつめた蜜柑箱を背負ってとびかかれば、やっつけることができるというのであった。こうなれば、アメリカが、なんとか工面して、重戦車を持って来ないだろうかという僕の妄想は、われながらなさけなかった。重戦車に対しては、さすがの爬虫類戦法も無駄なことを知っているらしいことが、せめてもの救いだったのだ。

「二十四時間訓練」は、腹這いながら、草の露をなめ、時には草まで食ったが、渇きと飢えは、まだしも我慢ができた。ねむけも、どうにかこらえた。どうにも堪えがたいのは寒さだった。十一月の終りごろからの夜明け前の苦痛といったらなかった。腹の下に、新聞紙を一枚敷いておくだけでも助かった。

二十年四月、わが部隊は、急遽、九十九里浜に出動することになった。米軍の本土上陸は、思いのほか早まって、一年さきの二十一年四月と推定されたからであり、アメリカが主力を持ってくるのは、九十九里のほかはなかろうというわけ。地勢に明るい千葉歩兵学校の将兵によって、この部隊が編成されたのも、それを考えてのことだったらしい。

攻撃を任務とする、わが決部隊は、防禦部隊（守備位置を固守するところから、ハリツケ部隊ともいわれた）のはるか後方、つまり成田から銚子をつらねる線にあって、上陸する敵を迎え討つ手筈だった。そのための陣地もできたのだが、召集もれを狩り集めてつれて来た防禦部隊は、陣地がさっぱりはかどらない。そこで、それの応援のため、部隊は八日市場まで進出したのだ。そして、部隊の引き受けた陣地構築のための用材を準備するため、精鋭なるわが第六中隊第二小隊は、臨時に伐木隊を仰せつかったのである。

先祖の残した見事な森や林を公定価格で片っぱしから伐り出すのだから、意気さかんな青年士官を隊長にしては、民衆の反感を招くやもはかりがたい。軍事能力は話にならず、杉と檜の区別もあやしいが、年だけはとっているらしいから、臼井少尉がよかろうということになったもののようである。

わが伐木隊の本拠は、部落の中央、丘の上の法華寺の本堂だった。兵隊たちは、そこで寝起きしていた。隊長室は、方丈の八畳が当てられた。下士官を信頼し、彼らに引率させて、兵隊たちを作業に出してしまうと、隊長は、しばし、隊長室に寝ころがって、ゆっくり新聞を読んだ。朝日新聞一紙しか配られず、それもペラ一枚の二ページだけ。僕は隅から隅まで丹念に読んだ。トップ五段ぬきの大本営発表は、はなはだあやしく、真実の重大記事ほど小さく出ることに気づいてからは、こまかなところに目をくばるくせがついていた。

七月のはじめだったろうか。一段三、四行の小記事、すなわち重大記事が目にとまって、思わずひやりとした。駐米大使の宋子文が、大統領に会い、すぐモスクワに飛んで、スターリンと会談、中国へ帰って、こう演説したというのだ。いわく「中国今後の問題は、戦後の問題である」と。ははあ、ソ連参戦か、中国はもう勝った気でいるんだナ、法華寺の方丈にあって、伐木隊長はそう判断した。

空襲がひどくなって、全国の町々が次々に焼きはらわれた。部隊本部のある八日市場へは、ひる日なか、敵の艦載機が、まるで散歩のように、ふらりとやってきて、屋根をかすめるばかりに、機銃掃射をあびせた。房総地方には、あっちにも、こっちにも、陸海軍の飛行場があるはずなのに、これに立ち向かう、ただの一機もありはしなかった。

夜は夜で、異常な光景が見られた。夜空をとどろかせて、B29の大群が渡って行ったこともある。敵機なのか、味方機なのか、見当もつかないのが、まっ赤に燃えながら、空を泳いで来て、近くでおっこちるのもあった。

夜なかには、警戒警報はいうに及ばず、たとえ空襲警報だろうと、伐木隊長は、いっさい無視することにきめていた。こんな山寺へ、貴重な爆弾を落すバカはあるまいと思ったからだ。もとより、軍紀はきびしい。警報のたびに、兵隊をたたき起し、所定の場所に避難させるよう、厳重にきめられていた。だが、そんなことをやっていたら、兵隊は一晩中眠るときがない。現に、八日市場の部隊などは、寝不足のため、兵隊はフラフラになっているとか聞いた。

わが伐木隊にあっては、警報が出れば、隊長だけが起きていることにきめていた。その代り、存分昼寝をしていたのだから、なにも隊長だけが、部下に代って、つらい思いを引き受けたわけではない。警報で起されると、おもむろに軍服をつけ、軍刀を握って、本堂の階段に腰をおろした。そして、空を渡る敵機のおとずれと、本堂に交響する兵隊のいびきに耳を傾けていると、悠久の思いで胸がつまった。悠久の思いとは何かと聞かれても、いまとなって、返答はできかねる。言ってみれば、人類とか文明、世界とか日本

に関することがらだった。それの過去、未来にわたる性質のものだった。この場合、未来というのは、われわれがアメリカ戦車の下敷きになってからのこと、その何十年、何百年さきのことだ。そして、この野蛮と愚劣にまで自身を追いつめたいくじなさを思わないわけにはいかなかった。

本堂から聞える兵隊のいびきは、いつまでも悠久の思いなんかにふけらせておくはずはない。結局、考えの落ちつくところは、明年四月、アメリカ戦車を迎えて、いま、いびき最中の六十幾人の部下に、どんな命令を下したものかということであった。どう考えたって、こんな愚劣きわまる情況のなかで、この六十人に、蜜柑箱を背負ってとびかかることを命ぜられるはずはない。中隊長であれ、大隊長であれ、あえて強制するなら、そのへんに蜜柑箱を投げ散らすほかはない。そこまでは、はっきりしていた。

といって、無抵抗のまま、むざむざ戦車の下敷きになるのもバカげている。さて、どうしたものか？　毎夜のように、警報で起され、本堂の階段に腰かけながら、考えのおちつくさきは、このことであった。考えられるかぎりの場合を考えたが、どうどうめぐりで、発展はしなかった。

それにつけても、東京に残っている友人たち——唐木順三、古田晁、中村光夫たちは、いまごろ、何を考えているだろうかと思った。

唐木順三と古田晁が、陣中見舞にやってきてくれてから、二カ月近くになる。僕はまだ伐木隊長ではなく、利根川べりの滑川町にいた。ここは鮒つりで知られたところ。つり宿に、農家に作らせたどぶろくを持ちこんで、久しぶりで快談した。そのときは、これほど戦況が急迫していなかった。どんな形で戦争が終結するか、いずれにせよ、そのときを期待して、われわれの計画だけは立てておこうというような話にはなったが、二升のどぶろくをもってしても、意気あがるというわけにはいかなかった。ちなみに、このどぶろく、別々の農家にたのんだのだが一升は五円、別の一升は二十五円だった。

われわれのもくろみというのは、出版についてだった。古田晁は、筑摩書房の社長であり、唐木順三と僕の二人は顧問格だったが、少しはましな本を出そうというので、同志的に結ばれた仲間だった。

古田晁は、中学以来の相棒で、大学時代は、下宿も同じだった。倫理学科の卒業を前にした彼から、今後の針路について相談をかけられたとき、僕は言下に、出版をやれ、といった。この煽動は彼として思いがけないものだったらしいが、独特の勘で、即座に期するところがあったらしい。さっそく、郷里の先輩岩波書店主をたずねた。岩波氏の意見は、はっきりしたものだった。出版など失敗するにきま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com